

第3回「岐阜県子どもの読書活動推進計画（第五次）検討委員会」議事要旨

■日時：令和7年2月20日（木） 13：25～14：30

■場所：岐阜県図書館 2階 特別会議室

■出席者：＜委員＞

岡崎信美、杉山喜美恵、蒲尚胤、宗宮昭雅

＜オブザーバー＞

馬場課長補佐（義務教育課）、上明代課長補佐兼係長（高校教育課）、

高橋課長補佐（特別支援教育課）、中島主任（子育て支援課）、

若森課長補佐（県民生活課）、和田課長（図書館）

＜事務局（文化伝承課）＞

高井課長、蒲課長補佐兼係長、鈴木主査

■説明・検討事項：「岐阜県子どもの読書活動推進計画（第五次）」素案について

■議事要旨：「岐阜県子どもの読書活動推進計画（第五次）」案について

（1）前回からの変更点・パブリックコメントについて（事務局より説明）

（杉山委員）

46 ページ（2）の項目の「図書」に打消線が入っているがどういう意味か。

（事務局）

特別支援教育諸学校への貸出資料は「図書」だけに限らず視聴覚資料もあるため、「図書」は削除する。

（杉山委員）

47 ページ（3）1 点目の「やさしいにほんご」の記載について、タイトルであれば「」をつけてはどうか。

（岡崎委員）

「やさしいにほんご」は言葉としては定着しているので言葉としては分かりやすい。

（図書館 和田オブザーバー）

県図書館ウェブサイトも「やさしいにほんご」というタイトルにしている。

（蒲委員）

実際の取組事例が非常にふんだんに記載されていて分かりやすく、読みやすくなった。

(宗宮委員)

計画が拠り所となり、学校も進んでいくことのできるモデルケースが記載されておりありがたい。その他の修正箇所も適切に対応されている。

(杉山委員)

パブリックコメントは小学生から9件の回答とあるが、計画についての意見を聞いたか。

(事務局)

計画案についての意見を聞いたが、計画案への意見というよりは図書館や学校に求めていることに対しての意見をいただいた。

(杉山委員)

子どもが見て分かるような、子どもの視点に立った推進計画というものを新たに作る予定はあるか。

(事務局)

今後、計画の普及について「出前トーク」を子ども向けにも行う予定があるが、その際には分かりやすい日本語で説明をしていく必要があると考える。

(杉山委員)

今後、子どもの意見を聴取する機会も必要となってくると思うが、その時に理解してもらえるような子ども目線の資料があるといいと思う。検討いただきたい。

(岡崎委員)

県が子どもの読書について考えているということ子どもにも知ってもらおうとよい。本や読書について興味を持つ子どももおり、積極的にこちら側の思いも知らせていく必要がある。もっと分かりやすいPRの仕方や、有効にPRできる方法を考える必要がある。
全県下的にはどのようにPRしていくのか。

(義務教育課 馬場オブザーバー)

小中学校、義務教育学校へは、教育事務所の国語や学校図書館の担当指導主事が直接市町村や学校へ出向く機会がある。その際に概要版のような形でお配りして、話をし、内容を伝えることを考えている。

(高校教育課 上明代オブザーバー)

県立高校については読書に一番関連が深いのが国語科となる。国語科の教科主任会議等を通じて計画について周知する流れとなる。

(2) 計画の今後の活用について（事務局より説明）

(岡崎委員)

計画はデータにて配布とあるが、公共図書館だけでなく公民館図書室も対象か。

(事務局)

各市町村へ周知するので、公民館図書室も対象である。

(岡崎委員)

教育センター主催の学校司書向けの研修の会場はどこか。

(事務局)

教育センターが会場と考えている。

(岡崎委員)

非常にもったいない。セット文庫については計画内でも紹介されているが、実際に学校の先生方にどういうものかを見ていただく機会がない。教育センター主催の研修も図書館で行い、セット文庫の現物も直接見ていただくと受講者の認識・理解を深めてもらえると思う。

(事務局)

教員の研修については関係課から情報もいただきたい。研修会場は基本、教育センターで実施ではないか。

(上明代オブザーバー)

学校向けの研修会場は基本教育センターで行うが、図書館、教育センター、どちらでもよい。

(宗宮委員)

感想になるが、特に学校で読書活動について何をすべきかがA3用紙1枚でしっかりと見えてくる。学校への周知も進むとよい。国の第五次計画でも不読率が話題になっているが、幼児期から高校生までの切れ目のない読書習慣確立のための取組が県計画にも反映されていることがきちんと書かれている。

小中学校は市町村立なので、市町村立図書館を利用することが多いが、県計画の方針に則って広く伝わることで、市でもいろんな取組、学校とのアクセス、双方向の読書活動の充実も進むといいと思っている。

全般的な意見・感想について

(県民生活課 若森オブザーバー)

家庭でも読み聞かせの活動はされているが、乳幼児期からスマホの画面を見せて、子どもをあやすなどの形が増えてきたことをとても危惧している。親子の読み聞かせを通して、親子のコミュニケーションを図ることを大事に働きかけているところである。

今回の計画内には家庭教育の取組や事例が挙げられていないが、保護者の子ども読書活動に対する意識を高めていく活動を進めることも、子どもたちの豊かな読書活動に繋がる。

市町村では、園や学校等と協力して保護者を対象に研修会や家庭教育学級を行っている。そのような機会を通じた子ども読書活動の啓発を引き続き、市町村に働きかけていく。

(子育て支援課 中島オブザーバー)

放課後児童クラブは本来ならば保育や遊びの時間だが、小学校1年生から6年生が同じ空間にいと、遊びも異なってくる。特に高学年の子が遊びではなく読書に進むパターンが多々ある。10ページにも実例があるが、公共図書館と連携することで、放課後児童クラブも本を持つことができる。公共図書館との連携で、常に新しい本を来所したお子さんや保護者に提供できる環境が整っているところもあると聞いている。計画を前進させるためにも、所管施設に対して啓発を行っていこうと思っている。

(特別支援教育課 高橋オブザーバー)

県立特別支援学校は、学校司書のいない学校がほとんどのため、県立高等学校のエリアマネージャーの学校訪問による支援を受けている。可茂特別支援学校は、特別支援学校向けのセット文庫を活用して読書活動を推進しているが、県立特別支援学校によって利用に差があるので、セット文庫の活用等紹介しながら子どもたちの読書活動の推進を働きかけていきたい。

(上明代オブザーバー)

高校において「読書」というのは単なる本を読むというだけではなく、生徒の思考力、判断力、表現力の重要な役割を果たしているというふうに考えている。「総合的な探究の時間」では各教科の学習だけではなく、生徒も自らの問いを立てて、情報収集、分析をして考えをまとめる力が求められている。そういう基盤になるのが「読む力」と考えている。

高校生の不読率が小・中学生に比べて急に跳ね上がることは非常に問題だと考えている。多くの高校では一斉読書活動等で、本を読む機会をできるだけ作っているが、今回の計画を踏まえて、高校教育課でも各校の取組をより支えながら、読書活動を推進したいと思っている。

(馬場オブザーバー)

義務教育課であれば現場や自治体に近いところで教育事務所の担当指導主事を通して積極的にアナウンスや伝達を行い、今回の計画が埋もれることがないようにしたい。また自治体には財

政措置がとられているので積極的にその活用を働きかけていきたい。

子供たち、特に小中学生は読書をする機会や本に触れる機会が多いが、多読だけではなく、「読書名人」や「読書博士」というように、読書の質を上げていくことを子供たちが目指している。それぞれの学校でいろんな取組がされているが、取組が実際に今回の計画のどの部分にあたるのかを考えていくことが、計画をより具体的に進めていく方向になるかと考えている。

(杉山委員)

5年間で社会の様相はかなり変わると思っている。昨年度に子ども図書館の講座を受講したときも、図書館にボードゲームを置いたり、デジタルのものを取り入れたりなど、図書館も多様になっていると思った。社会の変化に対応して、柔軟に計画を運用していただけるとよい。

(蒲委員)

高校生になると不読率が跳ね上がるというのは、やはりスマホとの関係性が非常に強い、大きいと現場で感じる。大人も同様で、今まで読書に充てていた時間をスマホに取られている。高校の職員室でもそういう雰囲気はある。前の会議で校長文庫を設置した話をしたが、15～20人の大人がリピーターとなった。つい先日初めて掃除の生徒が借りていった。地道な、スマホと読書を切り離す作業を進めている。

影響力のある教員から生徒に本を紹介させる、というようなことも、学校現場だったらできるかと思い、実践している。

(宗宮委員)

計画が概要版の1枚にまとまっていることで、学校がやるべきことがはっきりしていることと、小学校が担っている読書活動は、県図書館、高校、一般社会、公共図書館、みんなが地域ぐるみで、県を挙げて推進していることが分かり、本当にありがたい。小中の先生にも、私の立場からできる限り広げたいと思うような内容である。

不読については地道な活動であるが、コロナ禍に家にいる時間が長くて読書した人がいることを思うと、今、忙しくて時間がない人も、一旦落ち着いたときには子どもときの記憶をたどって本に立ち返ることができるような、本を手取る経験ができるような小中学校であるといいと思っている。全てが学校の取組で解決するわけではないが、今回の第五次計画が広く県内に広がって浸透していき、よく伝わるものになるといいと思う。

(岡崎委員)

スマホの件が出たが、真っ白な状態の子供たちを取り巻く状況は危機的状況だと思う。携帯の世界、情報がたくさんあふれている。周りの大人がよっぽど積極的に手を差し伸べていかないと本に出会わない子どもたちがいっぱいいる。それがもどかしい。

今回皆さんの思いを詰めた第五次計画ができたので、あとは広めていただいて、できるだけ子どもの読書環境を整えてもらえるよう願っている。